

どんびま

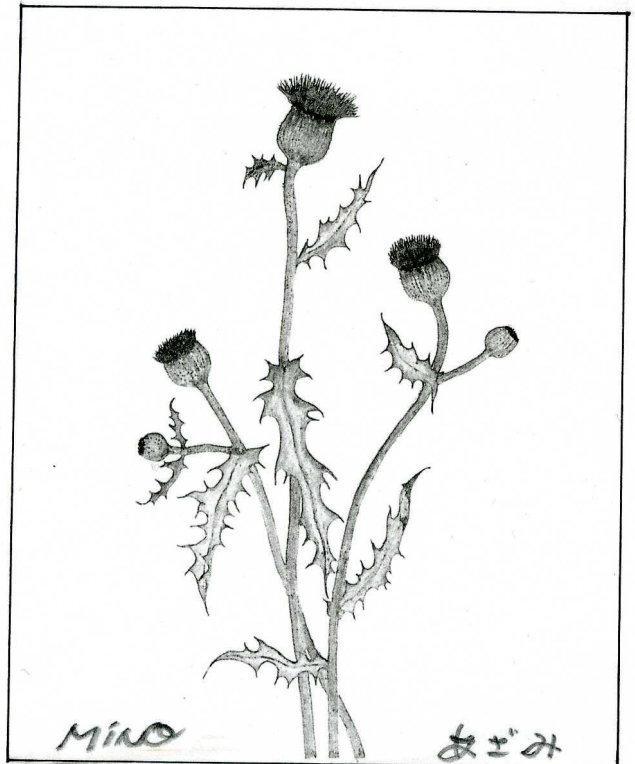
2009年7月10日発行
発行者 椛の湖農業小学校

雨

この頃は雨の日が続いて仕事もはかどらず、トマトのへたについたままの花びらの残骸や傷のついた葉などにカビがはえて、せっかく成りついたトマトがポトポトと落ちてしまうことにもなる。

太陽の当たることを待ち望みながら、雨は嫌いではない。雨が降らないとトマトに灌水する谷の水が細くなってしまふ。恵みの雨と言うだけでなく、雨の日はハウスの中でも原則的には農作業はしない、つまり雨は農家の休日なのだ。と言って休んではない。雨の日の仕事がちゃんとある。それでも雨の日は気持ち的に休める。

だいたい、日本人は雨の好きな国民らしい。日本は四季を通じて雨が降り、季節によったり、降り方を細やかに表現したり雨の名前は数え切れなくある。いわゆる天気雨を狐の嫁入りなどとも云う。日本ってちょっといい。
(草)



7月授業日のご案内

●日程 7月19日(日)

受付 9:00~ 9:30

始めの会 9:30~ 9:40

授業 (畑仕事) 9:40~11:30

カブトムシの運動会

昼食 カレーライス、サラダなど 11:30~13:00

授業 キャンプの相談 かかし作り 13:00~

終わりの会 15:00~15:15

●服装 作業のできる服装

●持ち物 手袋、タオル、長靴、雨具

買い物袋、箸、食器、スプーン

●締め切り **7月15日(厳守)**

☆カブトムシは育ってますか。運動会をしますので持ってきて下さい。

☆かかし作りの準備(先月お話したように、今月月にかかしコンクールをします。)

骨組みは準備しますので、頭部、帽子、着物などは各自で準備、工夫して下さい。

●問い合わせ・緊急連絡 TEL 0573-75-4417 ・090-5110-9362(山内総太郎)
TEL 0573-75-2109(椛の湖自然公園管理棟)当日のみ

～とくちゃんの農小レポート～

「香りの良い手揉み茶ができました」

例年この月は梅雨の真っ最中で、今年は特に朝からの雨にたたられました。前日の「第三回農小交流会」に参加された、姉妹校の先生スタッフの方々の見守る中で、6月の授業がはじまりました。

- 1 午前の授業。 お茶摘み、お茶揉み、小雨の中でしたが、各グループ毎に場所を決めて茶葉を摘んでハウス内に持ち込み、セイロで蒸してから筵の上で揉みました。昔はどここの家庭でも自家用はすべて手揉みでした。しっかり揉み上げたあとは、昔ながらの方法で乾燥させました。持ち帰ったお茶は今一度フライパンなどで、弱火で軽く炒りあげて良く乾燥させてから利用します。無農薬茶葉の手揉み茶は高級品です。味の程はいかがでしたか？
- 2 昼食。 ほうば寿司、野菜サラダ、かき玉汁。 おやつは ほうば餅。
この時期此の地方で最も特徴ある郷土食「ほうば寿司」は、朴の木の葉に寿司飯を乗せ、その上に各家庭で工夫した具材をのせます。朴の木はとても素性が良く柔らかい木質のため、版画の材料によく使われます。また葉っぱはとても香りが良くて殺菌作用があり、飛騨地方では枯れた葉を利用した「ほうば味噌」は名物となっています。
- 3 畑の作業。 人参の間引きをおこないましたが、全部抜き取った生徒は居ませんでしたか？ 間引きとは成長を促すために間隔を広くすることです。
大根、白菜、キャベツの収穫をしました。ブロッコリーは成長して花が咲いて収穫出来ませんでした。これが野菜の本来の姿ですが、私達人間は途中で取り上げています。持ち帰り用の大根は良く出来ていました。
- 4 稲の観察。 先月田植えをした田んぼを見にいきました。3本ずつ植えた苗がすでに何倍にも増えて（分蘖^{ぶんけつ}して）いました。

～とくちゃんのちょっと一言～

7月の授業には「案山子」作りが行われます。これは8月1日に開催される「O9 椀の湖フォークジャンボリー」に全国各地から集まってくるお客さんが、農小の田んぼの前の道を通ります。是非見て頂きたいので、必ず当日で仕上げて展示出来るようにして頂きたいと思います。十字の木部と中に入れる藁は用意しますので、頭部と衣装は各自で準備してください。

毎年多くのアマチュアカメラマンの良き被写体となり、ソバの花まつりと並んで椀の湖自然公園の名物になりそうな予感がします。

～あぼ兄の百姓ばなし～

「玉井袈裟男先生やすらかに」

『再び起き上がることのない床にあっても
僕は幸せでいられるかもしれません
かみ返し かみ返しても
尽きない思い出をもっていますから

幸せは
思い出の中にあります
思い出の中にあるものは
人と結んだ縁（エニシ）です
幸せは
人と人との仲にあります

そう思って生きてきましたから
今もそう思っていますから』

6月20日、農業小学校交流会で先生自作の詩を朗読し、参加者全員で黙祷をささげた。去る6月11日亡くなられた信州大学名誉教授の玉井袈裟男先生は農業小学校4校の縁を結んでいただいた恩人である。

4校とは、一昨年交流会を呼び掛けてくれた高山市の荒城農小、昨年第2回を開催し歓迎してもらった須坂市の信州すざか農小豊丘校、来年開催を快諾してくれた松本市の桜柿羊の里（オウショウノサト）農小と今年の当番校椈の湖農小である。須坂市は先生の生誕地であり、松本市は現在の居住地という縁もある。

ことの始まりは10余年前になる。当地に来られた玉井先生を農小に案内したのは丁度農小の作業日であった。休憩時間に農小の先生方を紹介した。開口一番「久しぶりに女学生に会いました。」と言われたことを今でも忘れない。

「きゃっきゃっ」と楽しげに談笑するおばあちゃん先生たちに女学生のような純真さを見られたのだろう。とにかく玉井先生は農小を気に入られ、「これは、子どもたちのためになるだけでなく、老人の生き甲斐にもなる」と言われた。年配者は永い人生の経験を生かし、伝える知恵や技術を持ち、孫のような子どもたちと気長に対応ができるのが良いと言われた。

それから度々、椈の湖農小はバスの視察団を受けることになった。その都度、引率者の玉井先生はあぼ兄を紹介するのに「これがアホ兄です。」といわれたものだ。「思い立ったらロクに考えもしないで走る（実行する）からアホだ。」「周りに良い人たちがいるからもっている。ハハハ・・・」

それが桜柿羊の里農小の開校になり、荒城農小からすざか農小に広がって行った。又、木曽福島町に「山（林業）の学校」、三重県南島町には「海の学校」が計画されて、田畑の学校との交流会や、椈の湖農小の修学旅行にと構想は広がっていった。

玉井先生は常々「物をもって語れ。それが物語」と言われていた。野菜ひとつ作らずに、マスコミの受け売り評論家になってはダメで、自分で作ってみる、これが大切

なことだと教えていただいた気がする。玉井先生は名古屋に住むご自分のお孫さんを椀の湖農小に入らせ、これを実践されご自身も家族として何度か参加をされた。

玉井先生とのそもそもの出会いは、あぼ兄たちが地域の基盤整備と活性化をはかろうと、その手始めに先生に「むらづくり論」の講演をしていただいたことによる。以来、「農村・農民が元気になる話」「生涯学習」など学ばせていただいたことは多い。

あぼ兄たちのむらづくりは中山間農村活性化事業（総工費15億円）と言う事業に発展し、十数年を経て機械の大型化に対応した基盤整備と長年の懸案だった椀の湖からひく農業用水のパイプライン化をすすめた。6月20日農業小学校交流会の会場になった「いきいき会館」はその仕上げとして昨年春完成したものだ。

交流会で、川津祐介さんは講演「今こそ新しい農業をはじめよう。土づくりから」の最後に玉井先生の詩集「風の置き土産」の中にある「卵一つの幸せ」という詩を朗読された。

『友の好意の生卵食う

熱いご飯に

もりくり上った黄身の色は

見るだけで幸せでした

醤油をかけて掻き混ぜて

鼻をかすめるほのかな香りは

嗅ぐだけで幸せでした

生卵食う

貧しく育った私には

年に一度あるかないかの幸せでした

それも病気のときだけでした

(中略)

貧しき者は幸いなるかな

卵一つの幸せです。

友の好意を有難く食べております。』

あぼ兄にとってはとてももったいない言葉をいただいた。アホ兄と言っていたいただいたのもあぼ兄には最高の褒め言葉におもえる。

数多くの教えをいただいたことに感謝をし、ご冥福をいのるばかりである。

